京都・西陣で子育て協同組合に挑戦

藤岡　惇（京都府／立命館大学教授）

虹の子クラブってどんなとこ

1992年春の「いま協同を問う全国集会」参加のために立命館大学にお出でいただいた方は、シンポジウム会場の正面を飾っていた手作りの「大だこ」を記憶されていないでしょうか。この２対の大だこは、ここで紹介する虹の子クラブの子どもたちの創作物だったのです。

私たちが、西陣織の工場ビルの一室を借りるかたちで、共同学童保育所・虹の子クラブを設立したのは、今から12年まえの1982年４月のことでした。虹の子クラブは現在では、指導員が５人、利用する子どもは小学生62名（高学年20名を含む）、中学・高校生20名の規模に発展しています。彼らのモットーは「ぼくら遊びのプロなんや」です。彼らは、上京子ども祭りをはじめ、さまざまなイベントの立役者として活躍し、「遊びのプロ」になりたくてもなれない同級生たちの羨望の的になっています。

虹の子発展の秘密

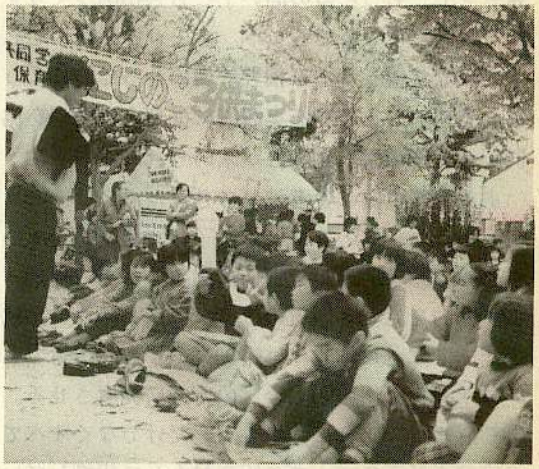
保育所がなかった時代、親たちはまず共同保育所をつくり、その公共的意義を世にアピールし、自治体から補助金をひきだし保育所を公設させてきた歴史をもっています。その卒園児の親たちは、同じ手法で共同学童保育所をまずつくり、その事業の公共性を明らかにするなかで、公費助成をひきだしたり、公設・公営化させてきました。虹の子クラブは、このような共同学童保育所の一つですが、いくつかのユニークな特徴を合わせもった存在でもあります。

第１のユニークさは、「みんなで支える民主的運営」原則を深めるなかで、親が共同出資する「子育て協同組合」と自らを規定するようになったことです。

第２に、「指導員こそ宝――その生活と成長の保障を」という原則を深めるなかで、単なるアルバイトの域を越えた指導員――魅力的な遊びを組織し、子どもの自治を育てることのできる高い専門的力量をもつ大学院卒のリーダー指導員の確保に成長したことです。

第３に、小学校の高学年を切り捨てず、彼らを「魅力的な遊びの塾」づくりのリーダーに育てていったことです。そのことが、虹の子クラブを子どもの自治を尊重する「子ども共和国」の方向へと発展させる原動力となりました。

第４に、遊びこそ、自治と創造力を育てる最重要な場であることを押さえつつ、進路を切り開く力をより総合的に保障する観点から(1)文化的・芸術的な感性を育てる営み（やまびこ座・洛北青年合唱団の協力で、演劇や合唱にとりくむ）、(2)学力保障のためのとりくみ（夜の時間帯を利用して数学教室や英会話教室を始めた）にも手をつけ始めています。ただし英会話教室などは、親の方が熱心に受講していますが。



公設児童館ができたなら

当初親たちのあいだには、虹の子のことを公設学童保育所が出来るまでの「緊急避難的」な組織、「必要悪」的な存在だと考える傾向がありました。しかし虹の子が総合的な子育て協同組合の方向に発展するなかで、また現実の公設施設のなかには、「託児所」的発想に立つ管理的で官僚的な性格のものが多く、せっかく公設されても子どもたちが行きたがらないという事例がままあることに気づくなかで、しだいに「公設公営至上主義」は消えていきました。京都市が、虹の子の近くに、安易で官僚的な形で児童館（学童保育所付設）を公設しようとしたとき、ある親はその心境を「公設はピカピカの冥土への一里塚、進みたくもあり進みたくもなし」という短歌に綴ったほどです（結局公設の試みは、拙劣な手法のために失敗しましたが）。

私たちは、この教訓をふまえて児童館を公設するばあいは、虹の子の到達水準を落とさない良質のものを建設すること、公設されるまでは、虹の子の事業の公共的性格をみとめて、公費助成するように京都市に要求しています。

近くに公設の児童館ができたばあい、虹の子クラブはどうなるのでしょうか。ハンパものの劣悪な児童館しかできなかったばあいは、虹の子を存続させて、もっと質の高い子ども共和国づくりをめざすことになるでしょう。ちょうど学校にも私学と公立学校とがあり相互に競い合っているように、劣悪な公営部門を実践的に批判する役割を協同組合部門が果たすことが求められるからです。

ある程度良質の児童館ができたばあいは、どうでしょうか。そのばあいでも子育て協同組合という組織形態は、別の分野に進出することで存続する生命力をもっているのではないかというのが私の予感です。具体的には、①虹の子を「子育てコープ＝教育文化協同組合」の方向に発展させる。②これまでのように共働き家庭だけでなくすべての家庭を子育てコープの組合員として組織していく。③3年生までしか措置対象にしない公設の学童保育の限界をのりこえ、高学年や中学生の遊びのニーズ、少年団づくりのニーズ、民主的な塾へのニーズ、演劇や音楽などの文化的なニーズなどを組織するコープとする。④指導員は、「雇われ者」からこのコープの共同出資者・共同経営者――ちょうど生活協同組合の専従職員のような存在となり、一般組合員とその子どもたちのニーズの総合的な組織者となる、という方向を考えているのです。

これは、虹の子が、共同学童保育所から名実ともに、教育文化分野のワーカーズ・コープ（労働者協同組合）に発展するという方向を選択することを意味するでしょう。その意味で、幼児の減少と公設保育所の増加のなかで先細りとなってきた共同保育所を子育てコープに改編することで新天地を開こうとする名古屋地域での実践の成否を、私たちは注目しているのです（『共同保育所運動から子育てコープへ』協同総合研究所資料集、第2号参照）。

94年4月、虹の子クラブにはピカピカの新一年生11名が入所してきました。ただし、12年間お世話になったビルが取り壊されることとなり、移転先を求めて現在、保護者会は全力投入中という新たな事態も生まれています。この試練をのりこえて、虹の子クラブがあらたな発展の方向を見いだし、一段とたくましく成長することを期待しています。

（虹の子の歩みの詳細は、虹の子クラブ編『ぼくら遊びのプロなんや――子育て協同組合の挑戦』1993年、かもがわ出版、にまとめましたので、ご参照ください。また連絡は、虹の子クラブ、〒602京都市上京区上立売通新町西、いずくらビル。電話075－432－1439まで）